

## 次の20年に向けて

國領二郎  
(2010年～2011年会長)

私ごとから入って恐縮だが、博士をとって米国留学から帰ってきたのがちょうど1992年CEMIT/CECOIA日本開催の夏だった。統合JASMINが誕生した記念すべき年である。会社員生活から海外の大学院に行ってしまう、日本の学界の様子がわからない駆け出し学者だったので、右も左もわからず不安だった。そんな自分を暖かく迎えてくださったJASMINを大変ありがたく感じたことをよく覚えている。急遽発表の機会もいただいた。経営学者でありながら、技術的な側面に関心を強くもっていたので、技術的側面と社会的側面を統合してシステムと見てくださる学会の存在も嬉しかった。

ただ、統合はそんなに簡単ではなかった。いろいろな表現ができるのだろうが、JASMINは二つの軸で統合に挑戦し続けてきた学会だと思う。一つは主体的に人工物を作り出すデザイン指向と、法則性発見を重視する客観指向の統合である。システムと社会が相互に影響し合いながら変化していくなかで、意図をもって構築されるシステムの効果を客観的に評価し、次なるシステムの設計に結びつけていくサイクル構築は簡単ではない。デザインの科学の確立に向けた努力は今後も続いていく。

今一つの軸は、実務界に貢献する現実志向(relevance)とアカデミアとして厳格さ(rigor)の両立だろう。システムという人工物を扱っている学会が、実務界の役に立たないところで議論しているのでは

意味がない。しかしその一方で、単に経験談を基に評論しているのでは、ほかに適用可能な一般性のある知に到達できない。データと論理に基づいた研究を続けるのが学会としての責務だ。

2010年4月から2011年6月までは会長を務めさせていただいた。法人化という学会の発展のために重要な仕事の仕上げ時期にお受けして、身の引き締まる思いだった。大勢の方にお世話になったが特に総務理事として支えてくださった森田理事と妹尾理事には感謝している。法人化が成って平野会長に引き継げたことにほっとしつつ、今は、少し気楽に副会長職を務めさせていただいている。

会長時代に法人化の事務作業が中心となってしまったなかで、少しでも狙いを絞って戦略的な取り組みをしたいと思った。そこで進めたのが、学会のグローバル化だった。情報システムの分野で日本は世界のブラックボックスになっていると言っても過言ではなく、大変優れたシステムが動き、それをめぐって良い研究がなされているにもかかわらず、世界への発信が乏しい。これではフィードバックも得られずに長期的には日本の情報システムが衰える原因にもなりかねない。若手の優れた研究を学会の支援のもとに世界に送り出すスキームを作って動かし始めているので、学会の皆さんにぜひ活用していただき、世界に羽ばたいていただきたいと願っている。